


 巻頭言

「持続可能な開発目標 (SDGs)」と植物防疫のアナザーストーリー

元日本農薬株式会社 取締役兼常務執行役員 こん の たか みち 今 埜 隆 道



2015年9月の国連サミットにおいて、持続可能な世界を実現するために、2030年までに地球規模での取り組みを行うための17の目標、すなわち「持続可能な開発目標“Sustainable Development Goals (SDGs)”」が採択され、日本政府はもとより民間企業や各種団体も其々のビジョンに基づいた具体的な施策を設定して活動を開始している段階にある。このSDGsの内容はすでに多方面から紹介されており、特に今後の植物防疫（農薬）の貢献については農薬工業会HPに掲載されているので、ここでは別の観点からSDGsと植物防疫の関係を探ってみたい。

第1の視点はSDGsの生い立ちである。SDGsは直截的には2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継とされているが、そもそもは地球規模での環境保護を訴えたレイチェル・カーソンの著書「Silent Spring (沈黙の春)」を原点とする指摘がある(谷林真理子:大妻多摩ニュース「校長室より」,2017年)。本書自体、第二次世界大戦後の米国におけるDDTやドリリン剤等を中心とする植物防疫の実態に基づいているため、歴史をさらに溯ればSDGsのルーツは半世紀前の植物防疫にあったとも言えよう。また本書の出版に際しては、当時の植物防疫関係団体との間に次のような逸話が残されている。まずカーソン女史自身、最悪の場合は提訴されることを懸念して、出版3か月前に雑誌New Yorkerに抜粋版を掲載して反応を見たという。案の定、賛否両論の火ぶたが切られ、その論争の様子をNew York Times紙が“Silent Spring Is Now Noisy Summer”と題して記事を掲載したこと、発売前から注目を浴びることとなった。特に当時の米国農薬工業会にとっては影響が大きかったものと推察されるが、実際の発売日が1962年の9月27日、すなわちその年の農薬販売がほぼ終了した秋になったことからまず安堵し、翌春の農薬当用期には農家も本書への関心を失っているだろうと高を括っていたという(Raleigh News & Observer紙の回顧記事,1987年)。しかしながら、結果は業界の期待通りにはならず、本書が契機となって64年にはFIFRA(日本の農薬取締法に相当)に初めてヒトへの安全性という概念が盛り込まれ、70年の米国環境保護庁(EPA)設立、72年のDDT使用禁止へと世の中は急激に変化していった。また85年にはカナダ化学品生産者協会によるレスポンシブルケア(化学物質の開発、製造、物流、使用、廃棄の全過程で自主的に環境・安全・健康に取り組み、社会からの信頼を高めていく企業活動)が提唱され、今

や国際的な経営倫理として定着している。ただし、必ずしも全面的に女史の問題提起が支持されたわけではなく、87年には「Silent Spring Revisited」と題される専門書が米国化学会から出版され、女史が主張した内容の信憑性について科学的な検証が試みられている。また、90年代以降はDDTのマラリア防除剤としての再評価もなされ、その観点からは本書の功罪の罪を重視する専門家がいても事実である。それでも、女史の発した警告が様々な形で尊重かつ継承され、没後50年を経た2015年のSDGsへ発展していったと見ることは極めて自然なことであり、そしてSDGsのルーツを思い起こせば、植物防疫が負っている責任もまた忘れてはならないと考える次第である。

第2の視点は教育との関連性である。SDGsについて言えば、17の目標のうち4番目にある「Education」が他のすべてのSDGsの土台になることを指摘する意見がある(P.S. Narayan, World Economic Forum, 2017)。また、冒頭に挙げた大妻多摩ニュースではSDGsを易しく解説し、都内の中高一貫校の在校生や家庭にも配信されており、すでに教育に生かされていることがわかる。一方、植物防疫の世界でも教育の重要性が指摘され、日本農薬学会や一般社団法人日本植物防疫協会のシンポジウム(2016年3月,2018年1月)では、義務教育時代から大学、社会、農業現場等の様々な場面で教育を充実させていく課題や解決策が議論されている。私事ながら筆者が初めて植物防疫(特に農薬)の教育を受けたのは高校1年の生物の授業であり、教材が1973年に「沈黙の春」に改題される前の初代翻訳本「生と死の妙薬」だったため、農薬という化学物質は強烈な印象として心に残ることになった。その後に農薬科学の発展やリスクマネジメント等に関する知識・情報を得る機会がもしなかったならばと想像すると、身をもって教育の重要性を感じているところである。

本稿では、SDGsと植物防疫の接点を見てきたが、植物防疫自体、半世紀前の農薬依存型から現在の総合的有害生物管理へ進化し、さらに地球温暖化による非生物的なストレス軽減も含めた総合的作物管理へと発展している。このような技術・思考の深化をさらに推し進め、教育によって正しく世の中や次世代に伝えながら実効性を上げていくことが、植物防疫関係者としてSDGs達成に貢献する近道ではないだろうか。

(「植物防疫」編集委員)